

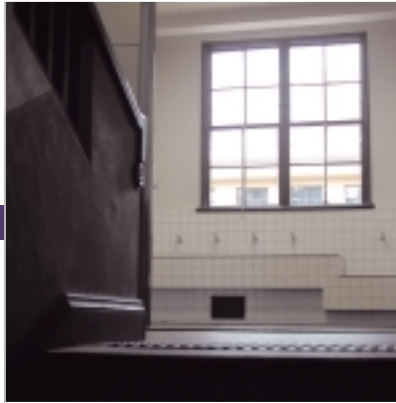
最近、自分(一九五〇年生まれ)の「世代」を強く意識することになる本を二冊読んだ。『ハイスクール一九六八』(四方田犬彦(一九五三年生まれ)著)と『おたく』の精神史―一九八〇年代論』(大塚英志(一九五八年生まれ)著)である。

前者は、著者の高校時代を中心とした思い出の記である。タイトルの「高校と西暦の組み合わせ」で、この時代に高校あるいは大学時代をおくった者には、目で何を取り上げようとしているかがわかり、気持ちもざわつくだろう。それは、学園紛争(もつと当時の臨場感を出すために名詞を羅列するなら、「全共闘、バリケード、デモ、アシ・ピラ、学生集会での怒号、学校封鎖などが日常化していた学生時代」の真つ直中で何を考え、どう生きたかということだ。

当時の耳目を集めた事件をあげてみると、「一九六九年一月…全共闘が東京大学の安田講堂をバリケード封鎖、機動隊との“砦”の攻防戦が行われる。その年の東大入試は中止になった」。

「一九七〇年一月…市谷の自衛隊駐屯地で三島由紀夫がクーデターを企て、失敗。三島由紀夫は割腹自殺した」。「一九七二年二月…連合赤軍―あさま山荘事件が発生、連合赤軍内での凄惨なリンチ殺人が明るみにでた」などがある。とにかく、表面的には政治の季節であり、政治的には激動の時代であった。

一方で、経済的には、戦後復興の象徴的イベントである東京オリンピック(一九六四年、同じ年に東海道新幹線も開通した)を経て、高度成長期(大阪万博…一



階段の踊り場と運動場を見下ろす窓
(小学校校舎を再活用した京都芸術センターにて)

編集後記

サブ・カルチャーの初代の担い手となったようである。彼らが、次の「おたく」世代の先輩として、目標となり、また「おたく」を育てた。

今、「おたく」から「新人類」、「団塊ジュニア」を経て、「ポスト団塊ジュニア」(一九七五年〜一九八〇年代後半生まれ)の時代だという。日本で経済成長を体験していない最初の世代とのこと。どのような嗜好、性向を持ち、どのようなライフスタイルを築くのか興味あるところだ。

—— 桜井律郎

From Editor

九七〇年)であり、大量生産、大量消費の中で、「大きいことはいいことだった。この大衆消費社会は、J・ポードリヤールによれば(消費社会の神話と構造)、一九七〇年出版)、家電製品や車といった生産されたモノに限らず、社会現象の全て、ファッション、広告から芸術、文化、政治、思想など何でも消費対象商品としてしまうとのことであり、学園紛争もTVの中のニュース(ショウ)として消費されたように思える。いずれにせよ、学生の異議申し立ては、なんら政治的・制度的変更につながらず、この時代に学生であった者にとつては、却って虚無やシニリズムを抱え込むことになっただけだった。

学園紛争華やかなりし頃に大学生であった全共闘世代とは団塊の世代であり、冒頭にあげた『おたく』の精神史―一九八〇年代論』を読んで思うのだが、この大きな虚無を抱え込んだ世代の多く(世代名が示すとおり、母数もそもそも大きい)がメインルートから逸れて、自由業やサブの道、アンダーグラウンドに進み、文化面では、

表紙写真 [上] オフィスビルを居住空間にコンバージョンするために、内装をすべて取り除いた室内(大阪・『鎗屋アパートメント』プロジェクト)

[下] 工事に入る前の空間を利用して、大学生たちによるコンバージョンの展示会を開催(同上)

裏表紙写真 [上] 横浜赤レンガ倉庫の夜景 [左下] 小学校校舎を利用した神戸・北野工房のまち [右下] 宮本佳明氏による「ゼンカイ」ハウス

おわびと訂正 本誌68号の初版印刷分において、小松和彦先生の論考の中に段落の重複がありました(P33下段)。筆者ならびに読者の皆様に深くおわび申し上げます。

CEL 69号 特集●都市のストック再生

発行 平成16年6月30日 頒価1,000円(送料290円)

- 発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 〒541-0051 大阪市中央区備後町3-6-14 アーバネックス備後町ビル4F
- 発行人 真名子敦司 Atsushi Manago
- 編集人 桜井律郎 Ritsuo Sakurai 弘本由香里 Yukari Hiromoto

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室
〒541-0051 大阪市中央区備後町3-4-9 輸出繊維会館7F TEL.06-6228-3315

印刷・製本●土山印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY & LIFE ©2004 OSAKA GAS CO.,LTD

禁無断転載複写

本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも小社の見解を表すものではありません。

本誌・バックナンバーのコンテンツや当研究所の活動内容はインターネットホームページ[<http://www.osakagas.co.jp/cel/>]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-6228-3315 Fax.06-6228-3302 cel@kbicom.net まで